

# 米大統領にトランプ氏



トランプ氏=UPI・共同

## クリントン氏破る

### 共和党政権8年ぶり

【ワシントン＝共同】ド・トランプ氏(七〇)が米大統領選は八日投開票され、主要メディアは共和党候補の実業家ドナルド・トランプ氏を退け、当選を確実にし

たと報じた。共和党は八年ぶりに政権を奪還。選挙で選ばれる公職に就いたことがない大統領は、一九五三〜六一年のドワイト・アイゼンハワー氏以来となる。

初の女性米大統領を目指すクリントン氏は選挙戦を優位に進めたが、政治の刷新を求める声の高まりや、国務長官時代に公務で私用メールを使った問題などが響いた。

トランプ氏は来年一月二十日に第四十五代大統領の就任式に臨む。任期は四年。副大統領にはインディアナ州のマイク・ペンス知事(五七)が就任する。

トランプ氏は日本などの同盟国に米軍駐留経費の負担増を求めるとして、

トランプ氏は党派や人種間の分断が深まる米国のかじ取りを担う。過激派組織「イスラム国」(IS) 掃討など外交課題は山積している。

トナルド・トランプ氏 1946年6月、米ニューヨーク生まれ。68年ペンシルベニア大ウオートン校卒。ホテルやカジノ、ゴルフ場などの事業を展開し「不動産王」と呼ばれる。タレントとしても活躍し「おまえはクビだ」という流行語を生んだ。知名度は高いが、政治経験は

ない。2000年大統領選で改革党の候補者選びに名乗りを上げたこともある。15年6月、16年大統領選への出馬を表明。共和党の指名争いで16人のライバルを退け、16年7月、党候補指名を受けた。

(共同)

おり、日米関係は新たな局面を迎える。

「米国第一」を掲げたトランプ氏は、過激な主張や女性蔑視発言などで党内に深い亀裂を残し、支持率の低迷に苦しんだ。しかし既存の政治が米国の衰退を招いたと感じる有権者の間で着実に支持を広げ、最終盤で逆転した。

8日、米ニューヨークで、トランプ氏がノースカロライナ州で勝利したことを伝える開票速報を見て喜ぶ支持者ら＝AP



8日、米ニューヨークのタイムズスクエアで、大統領選開票状況を市民らに伝えるスクリーン＝EPA・時事

### トランプ氏的主要発言は次の通り

「(メキシコからの移民は)麻薬や犯罪を持ち込んでくる。彼らはレイブ犯だ」「(メキシコとの国境に)巨大な壁を造る」「中国、日本、メキシコから雇用を取り戻す」(2015年6月16日、出馬表明演説)

「誰かが日本を攻撃したら、われわれは救援に駆け付けなくてはならない。でもわれわれが攻撃を受けても日本は助けに来なくていい。こんな取り決めは割に合うだろうか」(8月21日、アラバマ州での選挙集会)

「環太平洋連携協定(TPP)はひどい協定だ。オバマ政権の無能さは理解を超えている」(10月5日、ツイッター)

「イスラム教徒の米国人を全面的、完全に禁止すべきだ」(12月7日、カリフォルニア州の銃乱射テロを受けた声明)

「政治的に正しい言葉遣いをするにこだわっている余裕はない」(16年7月21日、共和党大会での指名受諾演説)

「有名人には女は何でもやらせる。思いのままだ」(10月7日、ワシントン・ポスト紙が暴露した05年の発言)

「この選挙はいかさまヒラリー(クリントン氏)を後押しする不誠実なメディアによって完全に仕組まれている」(10月16日、ツイッター)

「民主党はいんちきな世論調査結果をでっち上げている」(10月24日、ツイッター)

(ワシントン・共同)

# 世界に乱気流

想定外のことが続いた今年のトリを飾るのに、ふさわしい結果かもしれない。米共和党のトランプ氏の大統領選勝利は米国史だけでなく、世界史にも刻まれる番狂わせだ。予測不能なトランプ氏だけに、政権の姿は見通せない。トランプ大統領の誕生で世界が「乱気流」に突入することは確かだ。

今すぐ勝因を的確に分析できる自信はない。グローバル化で職を奪われた労働者階級の白人男性を中心に支持を集めたのは間違いない。相手の民主党候補クリントン氏の不人気も味方しただろう。だが、それだけでは不十分だ。あえて言えば、従来候補にはないトランプ氏が放つ強力な「磁力」が、想像を超えて有権者を引きつけたのではないか。

トランプ氏は選挙集会で具体的な政策をほとんど語らず、クリントン氏や他の政治家、マスコミ批判に時間を費やした。聴衆が飽きてくると「われわれはメキシコ国境に壁を造る。その金はメキシコ政府が払う。私を信じなさい」と叫び、会場を再び熱狂に包むのがパターンだった。誰もが知るセレブの億万長者が家用機で田舎の空港に降り立ち、自分たちに語りかけてくれる。「われわれは米国を再び偉大にする」。この時も決して主語は「私」ではなく「われわれ」である。

メキシコの負担で国境に壁を建設できると、本気で信じている人は多くない。政府に見捨てられたと感じる人々にとってより大事なのは、トランプ氏が初めて自分たちのことを真剣に考えてくれたという点だ。戦死した兵士の遺族への批判や女性蔑視発言でたまたかされても、トランプ氏の磁力が最後まで衰えなかったのは、民主、共和両党の主流派を含め既存体制に対する強い拒否反応の裏返しと言える。個人や人格攻撃に終始した「史上最悪の大統領選」後、米国は再び一つにまとまることのできるのだろうか。トランプ氏を支持した人々と、支持しなかった人々がすぐに融合するとは到底考えられない。来年一月に発足するトランプ政権がどこへ向かうのか、目を離せない。(共同・木下英臣)



8日、米ニューヨークで、落胆するクリントン氏の支持者＝ロイター・共同